ネイホウ
你好

香港日本人学校小学部
香港校だより
平成２７年度派遣
村上　大

＜はじめに＞

みなさん、你好（こんにちは）。４ 月から、香港日本人学校小学部香港校に派遣されました、鳥取市立遷喬小学校の村上　大（むらかみ　だい）と申します。赴任して４か月余り、まだまだ慣れない海外での生活、教育活動ですが、香港の様子と海外教育施設の現状について、少しずつ皆様にお伝えできればと思います。

＜香港について＞

香港といえば・・・何が思い浮かびますか。赴任前に、まず思い浮かんだのが、テレビで見たことのある夜景でした。香港の夜景は、長崎、モナコと共に、世界３大夜景の一つに数えられています。右の写真は、担任をしている６年生教室から写した景色です。まるで宝石箱のような眩さです。

美しい夜景とともに、思い浮かんだのは、ニュース報道されていた学生デモのことでした。香港は、正式名称を「中華人民共和国香港特別行政区」といい、１９９７年７月に香港の主権はイギリスから中国に返還されましたが、５０年間は香港が資本主義制度を存続することを保障しており「一国二制度」を導入しています。デモは、２０１７年香港特別行政区行政長官選挙が要因だったようです。２０１４年９月下旬から、銅鑼湾・金鐘・九龍の旺角の道路を中心に学生団体が占拠していました。香港日本人学校小学部香港校は、デモが行われていた灣仔区にあり、デモ開始１週間は臨時休校になったという経緯があります。赴任した直後、銅鑼湾のビクトリア公園周辺部では街宣している光景を見かけましたが、デモは鎮静化の方向に向かい、通学バスや公共交通機関にも影響が見られないのでほっとしています。

また、今年は戦後 70 年という節目の年にあたり、日本国内でも過去の戦争に対しての議論が行われていますが、香港と日本との関係については、先の戦時中は反日感情も高かったようですが、昨今はビジネスや旅行を中心とした良好な関係で、比較的親日的だと感じています。私のことを日本人（ヤップンヤン：広東語）だと知ると、好意的に日本語で話し掛けられることもありますし、何より現在、香港には、約２万７０００人の日本人が住んでいます。

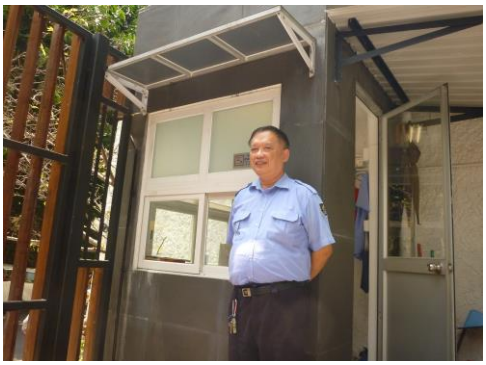
その他、飲茶と点心などのグルメと観光の街、香港のイメージがありますが、ロンドン・ニューヨークとともに、世界屈指の金融と貿易の街です。香港島の中環（セントラル）には各国の主要な銀行や証券会社のビルが建て並んでおり、ビルの隙間から見上げる空はとても小さく感じます。鳥取の広く美しい空と自然を恋しく思います。人口約７３０万人の大都市、香港。面積は、１１０４㎢で、人口密度は、１㎢あたり、約６６００人で、世界第２位です。しかも、人口の半分が、香港の約１２％に当たる香港島の一部と九龍を中心に居住しています。１１０４㎢×１２％に３６５万人が住んでいると考えると、人口密度は、約２７５００人！１００m四方に、約２７５人がひしめいていることに！とにかく人だらけです。

香港日本人学校小学部香港校について

香港日本人学校は、香港島側に香港校小学部・中学部があり、九龍半島側に大埔（タイポ）校小学部があります。また、香港校の小・中学校は、違った位置に所在しており、私が勤務している香港校小学部は山の中腹、ハッピーバレーにあり、中学部は、本校から２㎞ほど離れたブレーマーヒルにあります。

小学部香港校の児童数は、年度当初、３０３人でスタートしましたが、７月末には、帰国または現地校への転出により、３０人が退学し、また２学期には、２６人が転入予定というように、児童の出入りが大変多い学校です。６年間ずっと、本校に在籍している児童は、現在の６年生、４６人のうち、数えるほどしかいません。（６年生も７月末に５人が帰国転出しました。）

＜学校の設備と特色＞



２０１３年４月に新校舎になり、教育施設はとても新しく、広々と明るい校舎です。周囲は高い壁に囲まれており、正門には、ウオッチマンさんがいて、常時、人の出入りを監視するなど、セキュリティーに関して万全の体制がとられています。

高温多湿な気候ゆえ、空調設備も整っており、各教室には、サーキュレーターとエアコンが設置されています。それでも、湿度が９０％を超える日が多く、廊下はバケツで水を撒いたかのようにビチャビチャになり、掲示物も湿気で巻き上がることもあるので、長期間にわたる物はラミネートして掲示しています。　各教室には、黒板ではなくホワイトボードが設置されています。教員になって２０年近く、ずっと黒板にチョークでしたので、マーカーでの板書に慣れるまで苦労しました。また、教室の天井には吊り下げ式のプロジェクターが設置されており、教室前面の壁の端子とパソコンを繋ぐことで、すぐに映像教材を提示できるようになっているのは、とても便利で重宝しています。

＜グローバル教育＞

本校の特色の一つに、文化・国際理解教育の推進が挙げられます。グローバル化に対応した新たな取組として、週３時間ずつ行われていた英会話学習が、今年度から「英語科」となり、週５時間（低学年は週３時間）行われるようになりました。転出入が多い学校ですので、児童の英語力には、相当の幅があります。そこで、習熟度別に４クラスに分かれて学習を行っています。私は、担任している６年生の各クラスに日替わりで入っていますが、当然ながら全て英語での学習展開が行われており、ハイレベルクラスの授業には、私の拙い英語では、ついていくのがやっとです。英語力をブラッシュアップする必要性を改めて感じています。

本校は、来年で５０周年を迎えます。来年度４年生に創設される「グローバルクラス」では、ただ単に英語力を身に付けるだけでなく、日本人学校の特色を活かし、日本の学習指導要領に基づく教育や学校生活を行いながら、グローバル社会で通用する英語コミュニケーション能力を身に付けることを目標にしています。現在は、日本の５、６年生が行っている「英語活動」から更に「英語科」として、音声学習と併せて、読み書きの能力育成も視野に入れた学習展開が行われています。英語科スタッフは、全員ネイティブスピーカーで、出身地は、イギリス、カナダ、香港など多岐にわたっています。現在、４年生以上で図工イマージョン（英語による図工指導）が行われていますが、来年度からは複数教科にわたって英語イマージョンで学ぶことができるようになります。

＜おわりに＞

今回は、グローバル教育と英語学習のことを中心に書きましたが、香港は１９９７年までイギリス領であったという経緯から、広東語と共に英語が公用語となっており、日常生活は、ほぼ英語で事欠きません。金融と観光都市という側面からも、多民族が集う香港ゆえ、英語によるコミュニケーションの重要性を身に染みて感じています。しかし、一歩路地を踏み入って、街市（マーケット）で買い物をするとなると、現地香港人の多くが広東語を話しており、英語が全く通じません。「指さし広東語」なる本を片手に、身振り手振りで何とか過ごしている毎日です。そうした時、香港の人は、「広東語の分からないヤップンヤンが来たぞ。」と思いながらも、みな温かい笑顔で接してくれます。私も笑顔とジェスチャーで応えています。今後は、現地理解をさらに深めることができるように、少しずつ広東語の勉強もしていきたいと思っています。

まだまだ、香港での生活も日が浅いこともあり、十分なレポートには至りませんが、香港日本人学校小学部香港校の様子と香港の生活について、今後もお伝えしていきたいと思います。